

はじめとした伝統医療に関するコードも導入された。

筆者は高齢社会における ICD および ICF（国際生活機能）の活用について議論する「Future Data Needs and the Family of Classifications」というタイトルのサイドセッションで「The importance of Classification - Data for understanding ageing population in Japan」と題する報告を行った。ICF の改訂は今後も予定されておらず、国際的にどのように今後活用していくかが課題となっている。

（林 玲子 記）

国連ハビタットⅢ会議

2016年10月17日（月）から20日（木）まで、エクアドル・キトで、国連ハビタットⅢ会議が開催された。この会議は、国連人間居住計画（ハビタット）主催の20年に一回の国際会議であり、1976年にカナダ・バンクーバーで第1回が、1996年にトルコ・イスタンブールで第2回が開催され、今回はその第3回目であった。会議は国連加盟国の政府団による本会議以外に、市民団体や研究者等の活発な参加があったサイドセッションやネットワークイベントが行われ、会場内には国際博覧会のようなパビリオンが多く設置され、キト市内にはイベント型展示であるハビタット・ビレッジが企画・開催された。会議事務局によれば、会議参加者は国内から20,000人、国外167カ国から10,000人の合計30,000人の参加があり、合計1,000近くのイベントが開催されたとのことである。国連主催の大型会議は21世紀にはいつてからは国連本部で行われることが多く、1994年のカイロ国際人口開発会議、1995年の北京女性会議などの20年後の評価会議も国連本部以外で行われることはなかったが、今回のように1都市で大きな会議が行われたのは珍しい。

本会議で採択された「New Urban Agenda」は、持続可能な開発のための2030アジェンダの目標11「包摂的で安全かつ強靱で持続可能な都市及び人間居住を実現する」に沿ったもので、持続可能な都市開発を「誰一人取り残さない」ような「人間中心」の考え方で実現するよう求めている。セッション・イベント・パビリオンのテーマはスラム居住者のエンパワーメントから、ITを駆使した街づくりまで多岐に渡っており、都市人口が世界人口の半分以上を超えた現在、「都市」をテーマにするとすべての事象が含まれてしまうこと、またそのために焦点がぼやけるきらいもあると感じさせられた。筆者は東京大学大学院新領域創成科学研究科岡部明子教授が、現地キトのアルボルデ建築事務所と共同提案した「Bridging Formal [IN] Formal」と題するハビタット・ビレッジ・プロジェクトのセミナーで、都市人口に関する報告を行った。

（林 玲子 記）

家族とウェル・ビーイングに関する国際セミナー

大石亜希子千葉大学教授が研究代表者を務める文部科学研究費研究事業「女性労働と子育て世帯間の所得格差に関する国際比較研究」で、2016年10月18日（13:30～15:30）、国立社会保障・人口問題研究所第4会議室において2名の台湾からの研究者を招き国際セミナーを開催した。一つめは、国立台北大学の陳婉琪教授による「For the sake of the Children? Re-Evaluating the Consequences of Parental Divorce in Taiwan」と題した報告で、2001年に開始された台湾のパネルデータを用いて夫婦仲と10代の子どものメンタルヘルスには深い関係があること、離婚が子どものメンタルヘルスに及ぼす影響は、離婚以前の夫婦仲の質によること、具体的には、夫婦仲が悪い場合に離婚は子どものメンタルヘルスにプラスの効果を及ぼすことが報告された。二つめの報告は、台湾中央研究院の蔡明璋